

コア科目

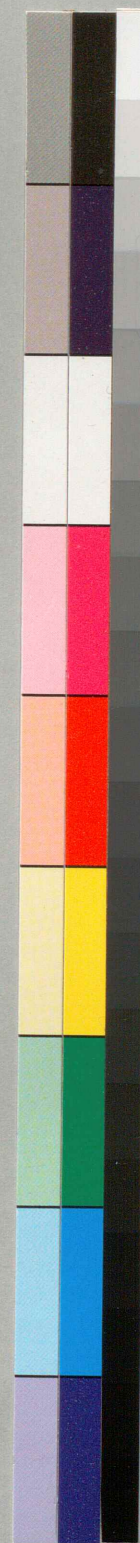
総合科目 総合コース

平成9年度

日本の諸相 ー文化ー (97後-Ⅲ)



お茶の水女子大学



平成9年度

総合科目 総合コース

開設講義目

総合コース

- ◇『学問と私』 (97前-I) 前期 水曜日 5・6時限
- ◇『学問と私』 (97後-I) 後期 水曜日 7・8時限
- ◇『心と体』 (97前-II) 前期 水曜日 7・8時限

- ◇『日本の諸相 -文化-』 (97後-III) 後期 水曜日 5・6時限
- ◇『インターネットの世界』 (97後-IV) 後期 水曜日 7・8時限

平成 9 年度

総合科目 総合コース

目 次

- ◇『日本の諸相－文化－』（97後－Ⅲ）後期 水曜日 5・6時限
 - ・講義テーマと担当講師 Ⅲ－i
 - ・講義日程 Ⅲ－ii
 - ・講義概要 Ⅲ－1

(巻末)

図書館活動

セミナー質問用紙

レポート表紙 - 『日本の諸相－文化－』（97後－Ⅲ）

総合コース

◇『日本の諸相－文化－』（97後－Ⅲ）水曜日 5・6時限

総合コースは、共通な一つの主題について、研究分野の異なる複数の教員が講義するため、総合的な視野から学ぶものである。

総合コース

テーマの概要

経済の急速な発展によって日本が国際社会において多くの注目を受けるようになった。それと共に日本の国際社会における役割が期待されてきている。しかし、日本に対する評価は必ずしも肯定的なものばかりではない。また、国内においても、経済成長の停滞を疑問視する意見もある。

日本の諸相 -文化-

このような状況を眺めるとき、日本を改めて文化的な側面から捉え直す必要があるように思われる。

そこで、日本の文化の多様性を捉え、その発展の歴史を振り返ることが、日本に対する評価を深めることにつながる。また同時に、学生が自らの文化を捉え直すことに有効となるであろう日本文化が提供する知恵を提供することをも目指している。

対象学年 : 1年～4年 (97後－Ⅲ)

履修単位数 : 2単位

※ 複数の講義を履修した場合、卒業までに合計8単位認められる。(同一テーマを重複しての単位修得は認めない。)

セミナー : 講義担当講師との質疑応答を中心とした「セミナー」を行う。履修する学生は、必ず出席すること。

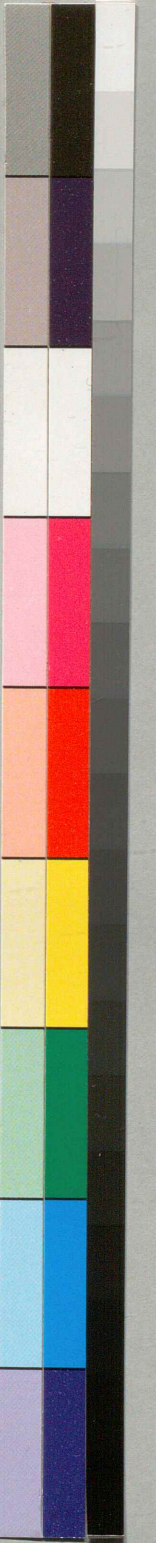
◆セミナー 1月14日
講義担当教員宛に質問事項がある場合は、所定の質問票に記入のうえ、所属学部事務室(1/12 教)へ提出すること。
(非常勤講師への質問は、できるだけ講義時間内に行うこと。)

図書館活動 : 学生の自主的行動日として、「図書館活動日(1月28日)」(巻末参照)を設定している。

試験方法 : 試験はレポートにより行う。
課題は二題 (A)テーマを通じての課題、(B)個別課題。
(詳細は本頁、別途指示する。)

◆出題日 1月14日
学生は、指示に従ってレポートを作成し、この巻末の表紙を添付の上、締切り日までに所属学部事務室へ提出すること。
◆締切り日 2月18日
(卒業予定者は、2月上旬頃 (1/20、2/10頃))

参考文献 : 参考文献には、なるべく附属図書館にあるもの、あるいは入手可能なものをあげた。



総合コース

◇「日本の諸相－文化－」（97後－Ⅲ） 水曜日 5・6時限

総合コースは、共通な一つの主題について、研究分野の異なる複数の教官が講義するもので、総合的な視野から学ぶものである。

テーマの概要

経済の急速な発展によって日本が国際社会において多くの注目を集めるようになり、それと共に日本の国際社会における役割が期待されてきている。しかし反面、日本に対する評価は必ずしも肯定的なものばかりではない。また、国内的にも、環境問題に典型的なように、経済優先の発想を疑問視する意見もある。

このような状況を顧みるとき、日本を改めて文化的な側面から問い直す必要があるように思われる。

そこで、日本の文化を様々な側面から考察することによって、現代の日本を知る手がかりを探ることが出来るのではないかと考える。また同時に、学生が国際社会で活躍する際に有効となるであろう日本文化に関する知識を提供することをも意図している。

対象学年 : 1年～4年

履修単位数 : 2単位。

※ 複数の講義を履修した場合、卒業までに合計8単位認められる。
(同一テーマを重複しての単位修得は認められない。)

セミナー : 講義担当講師との質疑応答を中心とした「セミナー」を行う。履修する学生は、必ず出席すること。

◆セミナー 1月14日

講義担当教官宛に質問事項がある場合は、所定の質問票に記入のうえ、所属学部事務室(1/12まで)へ提出すること。

(非常勤講師への質問は、できるだけ講義時間内にすること。)

図書館活動 : 学生の自主的行動日として、「図書館活動日(1月28日)」(巻末参照)を設定している。

試験方法 : 試験はレポートにより行う。

課題は二題 (A)テーマを通じての課題。 (B)個別課題。
(詳細については、別途指示する。)

◆出題日 1月14日

学生は、指示に従ってレポートを作成し、この巻末の表紙を添付の上、締切り日までに所属学部事務室へ提出すること。

◆締切り日 2月18日

(卒業予定者は、2月上旬頃 一別途、指定する。)

参考文献 : 参考文献には、なるべく附属図書館にあるもの、あるいは入手可能なものをあげた。

総合コース

◇ 「日本の諸相 -文化-」(97後-Ⅲ) 水曜日 5・6時限

〔講義テーマ〕	〔担当講師〕
第1講 言語と文化	長友和彦 III-1
第2講 日本古典文学に見る名前と日本文化	岩崎千鶴 III-2 (荻原)
第3講 雅楽の渡来と日本化	東儀俊美 III-3
第4講 心豊かな高齢社会をめざして	本間郁子 III-4
第5講 日本人の時間感覚	川崎信定 III-5
第6講 日本の食文化	小林彰夫 III-6
第7講 日本の色、日本の文様	小池三枝 III-7
第8講 日本の伝統的建築と現代	藤井恵介 III-8
第9講 日本における年中行事と現代	古瀬奈津子 III-9 (西澤)
第10講 日本のマス・コミュニケーション	小玉美意子 III-10
第11講 歴史から見た天皇	大口勇次郎 III-11
第12講 日本のシャーマニズム	佐藤光子 III-12

(巻末)

図書館活動

セミナー質問用紙

レポート表紙 - 「日本の諸相 -文化-」(A)・(B)

平成9年度(後期)総合コース

「日本の諸相 -文化-」(97後-Ⅲ)講義日程

開講日時:水曜日5・6時限 13:20~14:50 (共通講義棟2号館201室)

月	日	講義テーマ 担当講師	月	日	講義テーマ 担当講師
10	1	言語と文化 (日本語教育) 長友和彦教授	11	26	日本における年中行事 の成立 (日本語教育) 古瀬(西澤)奈津子助教授
	8	日本古典文学に見る 名前と日本文化 (日本語・日本文学) 岩崎(荻原)千鶴助教授	12	3	日本のマス・コミュニケーション 小玉美意子 非常勤講師 (武蔵大学 教授)
	15	雅楽の渡来と日本化 東儀俊美 非常勤講師 (宮内庁楽部技術指導員)		10	歴史から見た天皇 (比較歴史学) 大口 勇次郎 教授
	22	心豊かな高齢者をめざして -ボランティアの意義と役割- 本間郁子 非常勤講師		17	日本のシャーマニズム (哲学) 佐藤 光子 助教授
	29	日本人の時間感覚 -仏教的時間論との関連に おいて- 川崎信定 非常勤講師 (東洋大学 教授)	1	14	セミナ-
				21	(予備日)
11	5	日本の食文化 (食物科学) 小林 彰夫 教授		28	図書館活動
	12	日本の色、日本の文様 (生活文化学) 小池 三枝 教授	2	4	(試験期間)
	19	日本の伝統的建築と現代 藤井恵介 非常勤講師 (東京大学助教授)			

平野 和彦 (著) 日本語の文化 - 日本語の文化 -
 1997年7月1日発行 210頁 定価 1,800円
 (著) 平野和彦 (監修) 水谷修 (監修) 水谷信子 (監修)

著者	書名	頁数	発行年
平野和彦	日本語の文化	210	1997
水谷修	日本語の文化	210	1997
水谷信子	日本語の文化	210	1997
...

第1講

言語と文化：日本語のどこがユニークで、日本語非母語話者にとって習得がむずかしいのか？

長友和彦

言語を構造的に特徴づけるものに語順というものがあるが、主語や題目と言われるものが文頭に来て、述語が文末に来るといった日本語のような語順は、世界の言語の約半数を占める極めてありふれたものである。日本語の基本的な音の単位は、子音+母音の開音節と呼ばれるものであるが、開音節はどの言語にも観察されるし、日本語のように五つしか母音のない言語が世界の言語の中で最も多い。ほかにも、世界の多くの言語と共通した日本語の特徴はいくらでも挙げられる。つまり、日本語の構造や音声の基本的な特徴は、ほかの多くの言語にも見られるものであり、日本語は決してユニークな言語でないということになる。

しかし、日本語にはユニークな点がたくさんあり、外国人にとって習得がむずかしいということは今でもよく耳にする。ずいぶん上手に日本語を使いこなしているように見える留学生のような日本語学習者からでも、日本語はありふれた言語で、習得もやさしいなどという証言はまず得られない。ということは、日本語はやはりどこかにユニークさがありその習得もむずかしいと考えた方がよさそうだ。要するに、日本語はありふれてて習得もやさしい側面もあれば、ユニークで習得もむずかしい側面もあるということだろう。日本語を正しく理解するためには、その両方の側面をはっきりと区別できる能力・知識を身につけなくてはならない。

この講座では、いくつかの切り口から、日本語のどこが本当にユニークなのかという問いに答えてみたい。日本語の構造や音声を変えながらもう一度見直してみると、日本語が具体的な文脈や社会的文化的コンテキストの中でどのように使われ、どのような意味や機能を持つかという切り口、そして、日本語学習者にとって日本語はどんな言語なのだろうかという切り口である。

〔参考文献〕

水谷 修、水谷信子 著『外国人の疑問に答える日本語ノート』1～4
 ジャパンタイムズ社 (1988～1989年)

第2講

日本古典文学に見る名前と日本文化

岩崎(荻原)千鶴

「あをによし奈良」「あしびきの山」——地名や人名、あるいはものの名前にまで語義不明の枕詞をかぶせる古典和歌。古文の勉強をしながら、何のためにこんなものがあるのだろうと、思ったことはないだろうか。

日本最古の作品『古事記』は、神の名前を連ねる記述ではじまる。神は名前によって顕れるのだから、名前は存在そのものともいえる。神は人の世界に顕れるとき、
あ まがこと ひとこと よごと ことさか かづらき ひとことぬしのおおみ
「吾は悪事も一言、善事も一言、言離の神、葛城の一言主大神ぞ」（『古事記』）などと、説明を加えながら自分の名前を告げる。神の名前には意味があらねばならず、その意味が説明されねばならなかった。

いま神の名前を例にとったが、似たような問題が人名や地名、ものの名前にもある。そのことが枕詞の発生と関係し、そのようにして名前は人々に共有される意味をもつことになる。この名前の意味が共有される、という観点から日本古典文学作品のいくつかを採り上げ、日本文化の特質について考えてみたい。

〔参考文献〕

- ◆ 古代語誌刊行会 編『古代語を読む』桜楓社（1988年）
- 田中克彦 著『名前と人間』岩波新書（1996年）

第3講

雅楽の渡来と日本化

東儀俊美

雅楽とは、(1) 我国古来の「国風歌舞」と、(2) 中国や朝鮮半島を經由して入ってきた外来の音楽、それに(3) 平安中期、貴族階級に起こった「朗詠・催馬楽」の歌謡、という3種類の総称である。そして、現在一般的に「雅楽」といわれている外来系の音楽は遠い昔、林邑（南ベトナム）や天竺（インド北部）などに発生した音楽で、それが古代中国に伝わって発展し、6世紀から10世紀にかけて遣唐使や遣隋使、又は帰化人によってその殆どが中国と朝鮮半島を經由して、日本に入ってきた。当初の雅楽は今残っている雅楽とは全然違って、音階・旋律・使われる楽器のすべてが、夫々の国の色彩の濃い音楽だったと思われる。その雅楽は、9世紀から約1世紀の歳月をかけて、後年「楽制改革」と呼ばれる思い切った改革により、音階・旋律から使用される楽器までも統一され日本化された。現在伝承されている雅楽はすべてその時代に改革され、日本化された音楽である。この「楽制改革」という出来事があったので、雅楽は日本で千数百年の間伝承され続けて来たともいえる。では「楽制改革」で雅楽はどう変わったのか。これを中心として、雅楽にはどんな楽器が使われるのか、西洋の音楽とどこが違うのか。又中国大陸を經由してきた音楽と、朝鮮半島から入ってきた音楽との違い。そして、舞を伴う「舞楽」の種類などについても出来る限り分かりやすく説明したいと思っている。

〔参考文献〕

- 『音楽大辞典2』（ガガク）平凡社（1982年）760.3/065/2
- 押田良久 著『雅楽鑑賞』文憲堂七星社（1969年）768.2/076
- 荻 美津夫 著『日本古代音楽論』吉川弘文館（1977年）768.2/025

史

第4講

心豊かな高齢社会をめざして

－ボランティアの意義と役割－

本間 郁子

90年代に入り、バブル経済崩壊をきっかけにいわれる「会社人間」のあり方が見直されるようになった。他方、地域に根ざしたボランティア活動が、ボランティアに参加する人の心を豊かにすると同時に、人と人とのふれあいの場を提供することでその意義が大きくクローズアップされるようになった。

また、企業単位で社会貢献活動に取り組むところも増えた。ボランティア休暇制度を設け、社員が「企業市民」として、地域にかかわっていくことを積極的に推進する取組が企業のなかに着実に増加してきている。

21世紀には、確実に超高齢社会が到来するが、この社会を支えるためにはボランティア活動の役割がますます大きくなる。

本講では、こうした状況をふまえ高齢社会におけるボランティア活動の意義と役割について考えることにしたい。

〔参考文献〕

- 増田 力 著『再びのいきがい』講談社(1993年)
- 本間郁子 著『特養ホームで暮らすということ』あげび書房 (1995年)

第5講

日本人の時間感覚

— 仏教的時間論との関連において —

川崎 信定

「行く川の流れば絶えずして、しかももとの水にはあらず。澱みに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びてしばしも留まることなし。」にはじまる『方丈記』は、時間を川の水の流るるに譬えているが、われわれは、時間の過ぎ行くことをものの変化・動きによって知るのであって、時間そのものを直接の認識の対象としているのではない。ものの変化・動きがあることから、時間があると思っているのである。そこで、時間を考えることは、もののあり方をどのように理解しているかという、ものの存在論と密接な関連を持つてくる。

この講義においては、インドの仏教思想における時間の考え方を紹介しながら、これが中国大陸を経過して日本に受容された過程において、どのような変容と特徴を持つていったかを考究したい。

時間の捉え方は、それぞれの民族の終末観にも大きな影響を及ぼしている。西欧キリスト教社会における終末観との対比において、仏教的終末観の特色にも言及することができればと考えている。

〔参考文献〕

- 『講座 仏教思想』第一巻〈存在論・時間論〉 理想社 (1974年) カ-ド-ル
- 梶山雄一 著『仏教における存在と知識』紀伊国屋書店 (1983年) 181/Ka23
- 谷 貞志 著『〈無常〉の哲学』春秋社 (1996年)

第6講

日本の食文化

小林彰夫

1. 食生活における文化と文明 一国の文化とは、その国を構成する人々の生活手段、経済的レベル、民族性などが複雑に影響しつづ形成されるものである。一方文明には多分に技術的発展に支えられた人類に共通する進歩の面が強い。日本の食文化も、時代毎の技術的な発展を受けながらも、歴史時代を通して、米食文化という特性を一貫して保ってきたと言えよう。
2. 米食文化と肉食文化 日本の米食文化をヨーロッパの肉食文化圏の食生活と対比しつづ述べる。特に現代における畜産食品の摂取増加が、豊かな食生活の指標と考えられていることに対して批判すると共に、米中心の食事パターンが、副食物の種類を多彩にすると共に、年齢に応じた取り合わせを可能にしていることを強調したい。
3. 飯とパン 米は炊くもの、小麦は粉にするものと決まっているが、その真の理由は穀粒の構造の違いに原因があり、また含まれるタンパク質の性質によっても自ら用いられ方が変わる。それに伴う栄養学的問題が日本人の飯の主食感をはぐくんできたものと思われる。「米さえ食べれば何とかかなる」という思想はどこから来たのか。
4. 現代生活と食文化 「便利、健康、共通性」が今の日本人の一般生活における——民族学でいう「ケ」——食事形態であるが、この傾向が強まるほど人は対極にある「手間をかける、先ずおいしいこと、他では味わえぬ」食事を「ハレ」のシンボルにする。この二極の中を揺れ動く日本の食文化は、他の文化的事象とも関連するのではなからうか。

〔参考文献〕

- 石毛直道 著『食卓の文化誌』文芸春秋社 (1980年) 383/I73
 田村真八郎、石毛直道 編『日本の風土と食』ドメス出版 (1984年)
 小林彰夫、宮崎基嘉 編『食物と人間』放送大学教育振興会 (1994年)

第7講

日本の色、日本の文様

小林三枝

明治中期にはじめて日本を訪れたポルトガル人のモラエスは、日本の女性のきもの姿の美しさ、とくにその色を称賛する文章の中で、日本人の精神は母なる自然とともに働くので、色の概念というようなものを受け入れないかわりに、色の追憶、色の記憶といったものを理解していると述べている。

日本文化を服飾の面から考えると、モラエスの指摘したような色についての理解は、平安時代から明治時代まで、衣服の形はかわっても脈々と続いてきた。そこには、季節の推移にしたがって芽吹き、花咲き薫り、紅葉し、散っていく植物や、それらをふくめた風景などの自然と、人間との融和的な関係がある。この関係は服飾だけでなく、文学・芸術・年中行事・生活習慣などの中にもみられ、それらは相互に関連しあって、日本人の生活感情に投影してきた。

日本の服飾は文様表現にも特徴をもつ。その大きな平面は、絵画の画布のように文様表現の場を提供している。そこにたとえば季節感に結ぶ植物や風景などを写生的に描写することもあれば、物語・和歌・謡曲・年中行事・故事・ことわざなどを寓意的に描いたりもする。文様にさまざまな意味を持たせ、それを着て楽しみ、見る人に読み解かせる。

さらに、以上のような日本の色と文様を表現するための、独特な染織技法の数々がある。それらの中には人間わざとは思われないような、あるいはほとんど自己満足の域にあるとみられるような精緻な技法や見る人の意志をつく趣向がある。

〔参考文献〕

- 谷田閔次・小池三枝 著『日本服飾史』光生館 (1989年) 383/T987
 杉野 正・小池三枝 著『服飾文化論』放送大学教育振興会 (1994年)

第8講

日本の伝統的建築と現代

藤井 恵介

日本の伝統的な住宅は、近世の約300年間を通して発達し、近代になって安定した形式を獲得し、大多数の人々がそこに住むようになった。現在、地方の都市を訪れると、そこに伝統的な町並みを見ることができる。この住宅の形式は、第二次世界大戦後、昭和30年代からの高度経済成長、それ以後の住生活様式の大きな変化によって、失われつつある。日本の住宅の歴史を語る際に大きな障害となるのは、長い間に到達した日本の住宅の住様式の経験が、ほとんど見えかかっていることである。すなわち、伝統的住宅に関する美学が消滅しつつあるのである。

この新しい事態を招いた原因は幾つか考えられる。近代的な概念では、私有意識が大変に強調されたことである。かつて、建築の外観はお互いに共有されていた。街を美しく調和させることが重要な要件であった。個人の住宅をとっぴな外観にすることは許されていなかった。近代的私有概念は、すべての視線を住宅内部に集中させることとなった。従って、頑丈な塀で囲い込み、外側に対する美学は消滅した。また、各種の暖房・冷房設備の充実は、外部と内部をはっきり区別し、住宅内部の環境性能の上昇だけに注意を集中させることとなった。また住宅を供給するシステムも大きく変化した。従来は、多くの住宅が町の大工によって建てられた。従って、新奇な要素が入り込む余地は少なかった。しかし、現代ではハウスメーカーの手によって、標準化された住宅が全国のどこにでも登場するようになった。やがて個性のない住宅で全国が埋めつくされるのであろうか。

過去と現在の住宅と住様式に関する様々な課題を考え、その将来を真剣に検討してみたい。

〔参考文献〕

- 伊藤ていじ 著『民家は生きてきた』美術出版社 (1962年) 521/J89
- 稲垣栄三 著『文化遺産をどう受け継ぐか』三省堂 (1984年)

第9講

日本における年中行事の成立

古瀬 奈津子

正月元日、3月3日、5月5日、7月7日、9月9日といった年中行事の日は、現代でも私たちにとって生活の節目であり、一方では伝統というものを思い出させてくれる日ともなっている。これらの年中行事は、いつから日本で行われてきたのだろうか。

伝統イコール日本独自のものと思われがちな年中行事であるが、実は古代において中国から導入されたものなのである。しかし、日付については、古代以来変化はないが、行事内容をみると、現代のものとはかなり異なったものも多い。

この講義では、日本古代において年中行事が中国からどのように受容され、社会に浸透していったのか、また、中世以後、年中行事はどのように変貌したのか、その変化をもたらした原因はなにかなどについて検討し、年中行事をてがかりに、日本文化の枠組み、すなわち伝統というものの成立過程を考えてみたい。

〔参考文献〕

- 山中 裕 著『平安朝の年中行事』塙書房 (1972年)
- 中村 喬 著『中国の年中行事』平凡社 (1988年)
- 中村 喬 著『続中国の年中行事』平凡社 (1990年)

第10講

日本のマス・コミュニケーション

小玉美意子

現代日本を支配しているものの一つにマス・コミュニケーションがある。政治のように直接的権力行使はせず、経済のように実質的な力ももたないため、メディアの影響力は認識されにくい。しかし、私たちの意識形成と行動の相当部分はマスコミの影響を受けている。そこで、日本における主要なマスコミの特徴を量的・質的に明かにし、日本の大衆文化、およびジャーナリズムを考える一助としたい。

日本は、メディア先進国のひとつである。[新聞]世界に類例をみない全国紙の発達と新聞購読率の高さがある。[テレビ]地上波テレビ局の発達とそのネットワークの普及、CATVとCS放送も目下普及中で、受信可能チャンネル数は近く飛躍的に増大するであろう。[出版]雑誌は書籍を圧倒して出版の柱になっている。たくさん的人气雑誌を抱える少数の出版社が売上上位を占め、世界で有数の出版国にはいる。

質的には、外国と比較した場合、以下のような特質がある。1) 商業主義的である、2) 多様性の尊重よりも同質性に傾きがちである、3) 人権に関心が低い(差別に鈍感である)、4) 読者層をほぼ日本人と想定している、5) 男性・20～50歳代・健常者・日本人・大学卒・都市(特に東京圏)生活者、という属性をもった人がメディア発信者の中心である、6) 受け手としては多くの人々がメディア文化を享受している。現代日本文化はこのような特質から生じる特徴と深く関連をもちながら形成されている。

[参考文献]

- 香内三郎他 編『メディアの現在形』新曜社(1993年)
- 小玉美意子 著『新版・ジャーナリズムの女性観』学文社(1991年)
- Anne Cooper-Chen, with the collaboration of Miiko Kodama, Mass Communication in Japan, Iowa State Univ. Press, 1997

第11講

歴史から見た天皇

大口勇次郎

日本文化の特質の一つとして天皇の存在を挙げることに誰も異存ないであろう。明治憲法下の絶対神聖な天皇制よりもさらに歴史を逆上り、江戸時代の天皇のあり方を探ることによって、我が国における天皇の社会的文化的な意味と役割を考えてみたい。ここでは、徳川幕府が発した「禁中並に公家諸法度」によって天皇の仕事が学問に限定されたこと、江戸時代に女性の天皇が2回出現したことの意味を具体的に検討する。

[参考文献]

- 辻 達也 編『日本の近世2－天皇と将軍』中央公論社(1991年)
- 大口勇次郎 著「国家意識と天皇」岩波講座『日本通史15巻 近世5』所収
岩波書店(1995年)

215 / N71/2

211 / I95/15

第12講

日本のシャーマニズム

佐藤光子

日本の宗教文化の基層を考える上で、シャーマニズムについて考察することは必要不可欠である。シャーマンとは、神霊等の超越的な存在と直接的に交渉をすることができ、トランス状態において神の言葉を伝えたりする宗教者であるが、このようなシャーマンは、古代に限らず現在でも世界各地に見られる。本講義においては、日本におけるシャーマンの歴史的諸形態について検討するとともに、新宗教の教祖などを中心に現在にいきづくシャーマニズムについても紹介する。また、シャーマニズムの社会的機能、その背景となっている世界観等も検討する。

[参考文献]

- 佐々木宏幹 著『シャーマニズム エクスタシーと憑霊の文化』中公新書587
中央公論社 (1980年)
- C・ブロッカー (秋山さと子訳) 『あずさ弓 日本におけるシャーマンの行為』
上・下、同時代ライブラリー228、229、岩波書店 (1995年)

163/Sa 75
080/D83/228-229

図書館活動

この週の目的は各自が文献・資料を図書館の中で探索するのを促進することにある。入学時の図書館についてのオリエンテーションをよく思い出してほしい。そして、まず開架になっている部分を隅から隅まで一度は歩いてみて、棚の上から下まで目を通すことを勧める。数字による本の分類方法を知るだけでなく、哲学関係がどの辺に、美術関係がどの辺に、という具合に本学図書館の地理を覚えてしまおう。次に参考図書室の部分についても同じことを行い、百科事典、言葉の辞書、専門の辞書、年鑑、文献要旨の類がどの辺にあるかも覚えておこう。これは帯出が出来ないものであるが、自分が必要な時に誰かが図書館内で使用していることがあるので、一度は見ておいたほうがよい。

次にカードで素早く検索する方法を実習してみよう。ただし、日本でも欧米でも、カードのかわりにコンピュータだけで検索するところが増えている。本学でも、平成2年度からコンピュータを使ったLOOKS/Uというシステムが利用できるようになった。利用者用の端末機が2階の目録室(本の貸出と返却を頼むカウンターの前)にあるので、ぜひ慣れておこう。本学の本がすべてこのシステムで検索できるようになるには時間がかかるが、これからはこうした方式を使いこなせないと、よその大学や図書館に行っても仕事にならなくなる。

このシステムのためにも、また、わが大学にない文献を図書館を通じて他の機関から借りてもらうためにも、また、レポートや卒論を書くためにも、読みたい単行本や雑誌論文の記録をしっかり作る習慣をつけておこう。たとえば、「シバタという人の音楽史の本」といった曖昧な記録ではなく、柴田 南雄：『西洋音楽の歴史(上)』東京；音楽之友社、昭和42(1967)、というように、著者の姓と名、書名、出版地、出版社、出版年を忘れないように。日本の本の場合は、東京に限って出版地を省略することがあるが、最近は東京以外の本も多いので確認すること。この本をお茶の水女子大学から借りようと思ったら、自分のノートにも請求記号「762.3/Sh18/1」と、この本の配備部局である「図書館」と「音楽」の文字を記しておこう。雑誌論文の場合は、著者名、題名その他、雑誌名、巻号、発行年の他、始めと終わりの頁を忘れないこと。外国語の本や論文でも同じ情報が必要である。

なお、音や映像による情報を使う場合は、附属図書館の閲覧カウンターに申し出て視聴覚コーナーを利用するとよい。

コア科目

総合科目 総合コース

平成9年度

日本の諸相 —文化— (97後-Ⅲ)

レポート(A)

○提出期限 2月18日(水) — ただし、4年生(卒業予定者)は、2月上旬。

— 別途、指定する。

(A) テーマを通じての課題

課 題	
-----	--

学生氏名		学籍番号	
学年	学部	学科	講座・専攻

お茶の水女子大学

コア科目
総合科目 総合コース

平成9年度

日本の諸相 ー文化ー (97後-Ⅲ)

レポート (B)

○提出期限 2月18日(水) ー ただし、4年生(卒業予定者)は、2月上旬。

ー 別途、指定する。

(B) 個別課題

教官名	
課題	

学生氏名		学籍番号					
学年	学部	学科		講座・専攻			

お茶の水女子大学

目録
スーパ合録 目録合録

表紙目録

(目次) 一文 - 日本のお話

(目次) 一文

○出版部 日本スーパ合録 (目次) 日本のお話

1971年

スーパ合録

(目次) 一文

	各章
	目次

目次			各章
文章・漫画	挿絵	音楽	各章

日本スーパ合録

